

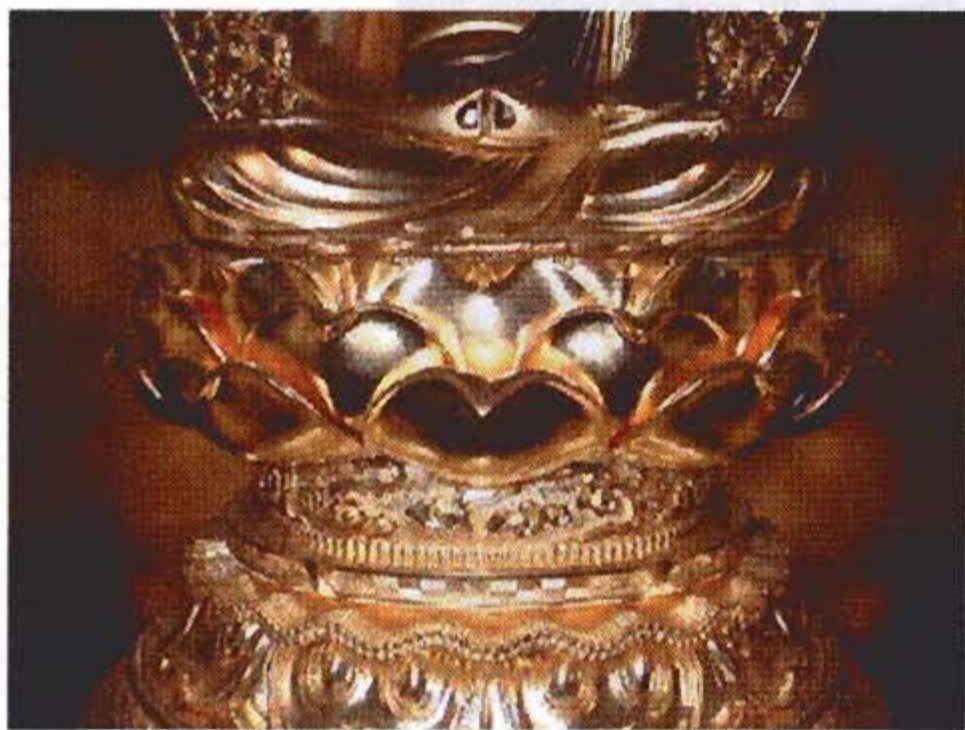
蓮華の話

真夏の昼下がり、水面に咲く睡蓮でも眺めて一休みという思いで、今日は蓮華（れんげ）のお話です。蓮華とは春の野に咲くレンゲではなく、「ハスの花」のことです。お経にも中国より西方の蓮華に、パドマ（鉢頭摩・紅蓮華）、ウツパラ（優鉢羅・睡蓮）、ニイロツパラ（泥盧鉢羅・青蓮華）、クムウダ（狗勿頭・地喜華）、プンダリカ（芬荼利迦・白蓮華）の五種類が記されています。もちろん、今日ハスには非常に多くの種類があることが知られています。また、蓮をかたどったデザイン、「蓮華紋」も寺院ではいろいろなところに使われていますので、その意味についてお話します。

本堂の屋根を葺く丸瓦、導師の持ち物としての柄香炉、法会の始まりを告げる半鐘にも散華でまかれる花びらにも蓮華紋が見られます。

さて、なぜ蓮華紋がよく使われるのでしょうか。その疑問を解く鍵は御本尊阿弥陀様や両脇士の観音・勢至菩薩様や善導大師・元祖大師の足元にあります。台座をよくご覧いただくと、その形がハスの花のかたどった蓮華座になっていることがおわかりになると思います。台座が蓮華座であることこの理由こそ重要なことなのです。

私たちがこの世にお別れをして、阿弥陀様の西方極楽浄土に往生させていただくとき、まず、



宝池（ほうち）に咲く蓮華の蕾の中に生まれます。これを、「蓮華化生（れんげけしよう）」と
いいます。実は、蓮華化生は阿弥陀様の西方極楽浄土の専売特許ではありません。お釈迦さま
に人々を教化するよう勧められた梵天（ブラフマー）様は、「梵天勸請」といいます）万物を
創造した神様です。宇宙のはじめ、光明神ビシュヌのおへそから蓮茎が生じ、さらにその花か
ら生まれたといわれます。では、なぜ蓮なのかといいますと、蓮は泥水から生長してもそれに
汚されること無く清浄さを保つからです。また、梵天様を生んだ蓮は光り輝いており、蓮華は
光明の象徴でもあります。それゆえ、仏・菩薩・天人など聖なる者、あるいは物が蓮華から生
まれてきます。かえりみれば、私たち凡夫が、阿弥陀様のお力で蓮華の中に生まれることがで
きるということが、いかにありがたいことであるかがわかります。

また、仏画には天を舞う天人つまり飛天（アプサラス）が、天空で散華（さんか）し、ハス
の花を散らすと、そこから蓮華化生がおこり、天空で仏・菩薩・天人などが生まれる様子が描
かれています。

ところで、当山でも、毎年、お施餓鬼の法要の始めに、導師・
脇導師の全員で散華をいたします。私たちの散華も蓮華の花びら
をかたどってあります。それは、お花をお供えするだけでなく、
阿弥陀・釈迦等諸仏、観音・勢至・地藏等諸菩薩様を堂内にお迎
えする意味が隠されているのです。

